2023年12月17日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

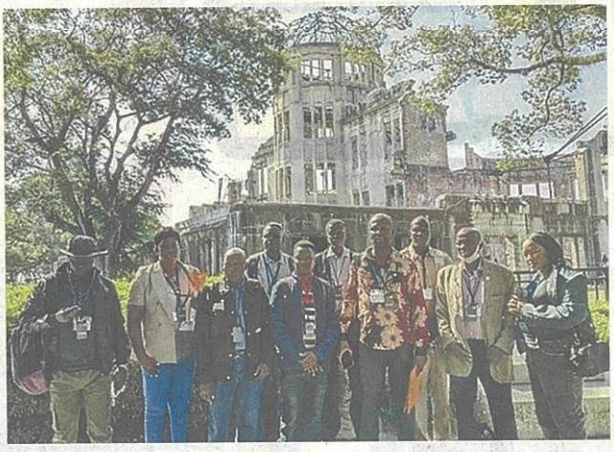
南スーダン
ローレンス・ムソケ・サミュエルさん(54)
中央エクアトリア州
平和構築省部長

広島の復興をモデルに

1945年8月6日のたった1日で、広島の多くの人々が無残に亡くなった。原爆の投下で、普段の生活を営んでいた人々が突然、竜巻のように生じた熱風と黒煙にのみ込まれたのだ。

今年10月、私たち南スーダンの行政官はJICAの研修事業で東京、広島、福島を訪問した。広島の原爆資料館を訪れた私たちは、写真や遺品などの展示を見て憤りを覚えた。この原爆投下から78年の間に、日本は第2次世界大戦で廃虚と化した多くの都市の復興を遂げた。広島もそのうちの一つとなっている。

南スーダンは長年の紛争の影響により、行政と住民の信頼関係に課題があると考えられている。今回の訪日研修を通じて私たちは、住民のニーズに応えられる優れた地方自治制度や国政について学び、研修を受けた。その過程で、原爆投下のような人がなし得る「悪」と、一人一人が大切にされる住みよい世界づくりのためになし得る「善」を学ぶ機会を得た。



日本研修で原爆ドームを見学する南スーダン行政官一行。後列中央が筆者

あの日以来、広島は未来に希望を与える選択をしてきたと私は思う。アフリカで古くから伝わるウブントゥ哲学の言葉に「私たちがいるから私がいる」という言葉があるが、人々が助け合って困難を乗り越えてきた広島をはじめとする日本の姿に重なるからだ。災難に見舞われたとき、日本人は「自分たちは乗り越えられる」と信じているようで、私たちはその実践を日本で目にした。

私は、母国南スーダンが明るい未来への道を切り開くためには、民族間の対立や紛争などの課題に強い意志をもって取り組む必要があると考える。今後、南スーダンが真の平和の下、国の復興や開発を意欲的に進めていくには、日本が歩んできた戦後の復興の実践が非常に良いモデルになると思う。